

知る・見る・考える
八幡市民の
交流誌

きずな

Vol.34

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

◆ 目次 ◆

八幡に生きる	… 1
先史・原史時代の八幡	… 2
推しの一冊	… 6
窒素肥料を施肥しないと 作物は育たないのか	… 10
八幡 俳句歳時記	… 11

八幡に 生きる

街の表情を切り取る

フォトグラファー

永野一晃



今年80歳になる永野さんは、今もファインダーを覗き続けている。八幡市の男山団地に居を移した20代するとき、すでにプロのカメラマンとして、雑誌、企業誌、広告、人物インタビューなどの撮影で活躍し、現在はアマ・プロの指導も行っている。キャリアは60年ほどになる。「シャッターを切り続けること、それが私の元気の元です」

大谷川の桜→



←放生池の
カワセミ

と話す永野さんは、時間があれば愛用のカメラを手に八幡の街をフィールドワークしている。風景や動物、植物、そして人など、八幡市の魅力はたくさんあると言う。

「街は生きていて、季節の変化、人為的な変化などで常に姿を変えています。それを記録するのも大切なことだし、おもしろいと思っています」

たとえば、松花堂庭園の季節の移ろい、石清水八幡宮や円福寺の歳時、男山の野鳥、上津屋橋（流れ橋）の建て替え、内里の田園風景、背割りの堤や大谷川の桜などなど、風景から動植物まで、永野さんは八幡の街の



↑湯立ての神事

表情を切り取り、レンズに収めていく。

「ぶらりと撮影に訪れることで、人との出会いも増えていきますね。この間も市役所の人から電話があつて、旧庁舎がほとんど解体されて東の風景がよく見えますよと情報をいただきました」

実は永野さんは、八幡市観光協会が定める八幡市観光応援団の初期からのメンバーでもある。FacebookなどのSNSで撮影した写真を毎日発信し、更新して内外の人たちに紹介している。筆者もその一人だが、SNSで永野さんの写真を見つけ、いつのまにか毎日鑑賞させてもらっている。

「被写体に向かって連写はしません。一枚一枚、意識してシャッ

ターを切ります。どれだけ自分のカメラに入っているか、自分の見たまま、いや、それ以上のシーンが撮れたら、やったあ！という感じですね」

この気持ちに、仕事と趣味の境はないという。八幡の街を、暮らしの舞台として日常を過ごしている人は多いだろう。でも、道を歩いていて、エキサイティングすることがあるだろうか。たとえ小さな変化があつても、気付かずに、無意識に通り過ぎてしまっていることが当たり前である。

さてさて、今日からあなたもカメラを手に、小さな発見を求めて街にくり出してみてはいかがだろう。八幡の街の、素敵な表情に出会えるかもしれない。

(構成・文：福川 肅)



↑流れ橋



濱田 博道

弥生時代

「農耕のはじまりと弥生土器
そして階層社会へ」

一、はじめに

1万年以上続いた日本列島の狩猟・採集中心の縄文文化は、東アジア、特に中国での農耕社会の成立、鉄器使用の広まりの影響を受け、大きく変化します。最近の研究成果によれば、約3000年前（紀元前10世紀頃）、東アジアから北部九州に水稻耕



『京都府遺跡地図』（電子版）に上書して作成

作が伝わり、水田で米が作られ始めます（国立歴史民俗博物館2003）。水稻耕作の技術は北部九州から年月を経て日本各地へと伝播していき、紀元前6～5世紀頃には、西日本にも水稻耕作を基礎とする弥生文化が成立します。また、紀元前5～4世紀頃までには、北部九州に青銅器や鉄器などの金属器が大陸からもたらされて普及していきます。近畿地方にも金属器が伝わってきます。水稻耕作・金属器はやがて東日本にも広まり、北海道と南西諸島を除く日本列島の大部分は、食料採取段階の文化から食料生産段階の文化へと移ります。土器は厚手で縄目のついた縄文土器にかわり、明るく簡素で優美、赤焼きの弥生土器が使われます。この弥生文化は古墳がつくられるようになる3世紀半ばまで続きます。弥生時代は土器の型式と文化の変化にもとづ

いて、一般に、草創期・早期・前期・中期・後期に区分され、草創期・早期は北部九州の一地域に限られます。

二、八幡地域の弥生前期・中期

（紀元前4世紀頃～1世紀頃）の遺跡

八幡地域で確認されている弥生時代の最も古い遺跡は内里八丁遺跡・金右衛門垣内遺跡・美濃山遺跡です。

☆内里八丁遺跡

内里八丁遺跡（内里八丁・日向堂・今福他）の自然堤防上にある土坑から縄文晩期の縄文土器（深鉢）の底部や土器破片が出土していることは、前回述べた通りです。この発掘時、内里の木津川旧流路の自然堤防・中州状高台（高台の幅は50m以上）の尾根筋上から弥生時代前期～中期初頭の竪穴住居の遺構や石器などの遺物とともに、ほぼ全面から弥生中期を主体とする遺構と遺物が検出されています。遺構は竪穴住居1棟、土坑13件、炉跡などの焼土・炭化物集中部10件、溝1条などです。遺物としては土器類の破片約2500点、石器類441点（石鏃39・石包丁9・削器2・楔形石器10・石錘8・砥石4・石核2・剥片130以上・碎片20

0以上・石小刀1など）が出土しています。紀元前4世紀～紀元前後頃のものと考えられます。

検出された竪穴住居（弥生前期末～中期初頭）は円形の遺構です。1棟のみですが、周辺地から炉跡の遺構が検出され、竪穴住居のあった可能性も指摘されています。円形の住居跡内からはやや古い様相（弥生中期初頭中心）の石鏃・石小刀・砥石・磨製石器・石包丁などの石器が出土しています。石鏃が多いことから狩猟活動が行われていたことが窺え、稲を刈り取るための石包丁やそれと同じ石材の剥片も散見されています。ので稲作も行われていたと考えられます。また、住居内から石の破片が3000点余り出土しており、その異常な多さから、住居内に剥片あるいは半製品を持ち込み、破損した石器の刃付け、再加工作業がおこなわれていたと推察されています（京都文化博物館調査報告書第13集内里八丁遺跡 第二京阪道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査1998京都府京都文化博物館）。内里八丁遺跡の別の箇所では土坑（弥生時代中期）から土器片や甕も出土しています（『京都府遺跡調査報告書第30冊内里八丁遺跡Ⅱ』）。

☆金石衛門垣内遺跡

美濃山丘陵の金石衛門垣内遺跡からは弥生中期の土器が採集されており、集落があったと推測されています（八幡市教育委員会『八幡遺跡地図2005』）。この遺跡内の美濃山井ノ元所在の畑から1638点もの石器・石製品が採集されています（藤林金嗣氏「八幡市美濃山在住」による、『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第33集』付載報告）。その中には稲穂を刈り取る石包丁や弥生時代の石器も含まれています。このことから弥生中期には稲作が行われており、金石衛門垣内遺跡はその中核的集落であったと考えられています。また隣接地域である幸水遺跡からは方形周溝墓（低い墳丘をもち、墓域を幅1m前後の溝で方形に区画した弥生時代古墳時代初頭の墓）が18基検出されています。中期後半のもので、金石衛門垣内遺跡に対応する墓域（墳墓群）と推定されています。

また八幡市域ではないですが、第二京阪道路建設に伴う発掘で、木津川対岸の市田齊当坊遺跡・佐山尼垣内遺跡（いずれも久御山町）が検出されました。弥生中期の南山城最大級の遺跡です（京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概

報』第84冊・95冊・101冊）。市田齊当坊遺跡からは遺構として竪穴住居跡4基・方形周溝墓14基以上・環濠・国内最大級の井戸枠を持つ井戸・環濠状の数条の大溝が検出され、遺物として碧玉製管玉その未成品、多量の碧玉剥片、200点以上のサヌカイト製の石針、石鋸、砥石、石剣45点以上・石包丁130点以上、壺・甕などの弥生土器などが出土。玉づくりを生業とする弥生中期の拠点集落です。木津川・巨椋池を利用して各地と交流していたと推察されます。八幡市域の金石衛門垣内遺跡で管玉未成品や石剣が出土し、備前遺跡からも石剣・石戈が出土していますが、この市田齊当坊遺跡との関連の可能性があります。佐山尼垣内遺跡からは遺構として方形周溝墓8基・竪穴式住居跡4基・溝跡・土坑など。遺物としては弥生土器（壺・甕・高坏など）が出土。その中で特にシカ3頭が描かれた絵画土器は、男山・美濃山丘陵のシカをも連想させ、ロマンをかき立てる土器といえます。他に細頸壺などの供献土器も出土しています。

☆美濃山遺跡

美濃山遺跡からは縄文・弥生時代

の石錐（石のおもり）が出土しています（『京都府遺跡調査概報第148冊』）。

三、弥生時代後期の遺跡

弥生時代後期には、八幡市域では遺跡が急増します。遺跡を平地部のものと丘陵上の高地性集落に分けてみましょう。

①平地部の集落

☆内里八丁遺跡

内里八丁遺跡では、前期・中期に続き後期も継続して活動が営まれます。発掘調査により後期古墳時代初頭の竪穴住居跡が32棟、弥生時代（前期・中期）に始まる水稲耕作の水田跡が総計107枚（小区画のもの）検出されています。水田に水をとりにける水口は7口、田

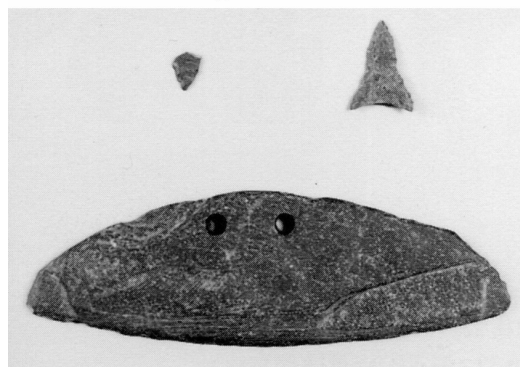
縄文晩期～弥生末期の

内里八丁遺跡



痕・足跡は無数に検出されています。水田は上下2層に分かれており、その間に洪水砂層、上層の上にもさらに砂層が存在し、古い水田を洪水が襲い砂礫層が堆積、木津川の氾濫が繰り返され、水田の稲の切株、人や動物の足跡までそのままパックされて発掘されています。他に土坑、流路溝のほか、方形に区画し、低い墳丘をもつ方形周溝墓や土器溜りなどの遺構も検出。遺物としては弥生土器（貯蔵用の壺・煮炊き用の甕・盛りつけ用の高坏・食器を載せる器台・食べ物・水などを入れる容器の鉢など）、木製品（鋤・鍬・横槌・田下駄・櫂・梯子など）、石製品（石鋸・尖頭器・紡錘車・砥石・鋳型・石鍋など）、

石鏃と石包丁



内里八丁遺跡出土 京都文化博物館『内里八丁遺跡』1998より

✓土製品（土錘・土玉など）玉類（管玉・勾玉・白玉・ガラス小玉）など、数多く出土しています。弥生土器の中には丹波・丹後（山陰）、近江・東海、播磨、讃岐、河内など多方面地域から搬入されているものもあり、佐山尼垣内遺跡（久御山町）同様、巨椋池・三川合流（木津川・宇治川・桂川）の水運や陸運を通じて各地と交流を持っていたと推察されます。弥生時代以後も継続する遺跡であり、山城地域で最も長く続く貴重な遺跡です。

☆他の平野部の遺跡

他に平野部の集落としては、上奈良遺跡（上奈良南ノ口他）、水田跡遺構検出）、新田遺跡（内里古宮他）、木津川河床遺跡（川口他）などがあり、

遺構として竪穴住居、遺物として弥生土器が検出・出土されています。

弥生時代後期には紀元前1世紀頃を境に気候が大きく変動し、古墳時代の6世紀ころまでは降水量が増加します。先述したように、内里八丁遺跡や上奈良遺跡の水田跡では洪水により砂礫層が水田を覆っています。しかし、時を経てまたそこに水田耕作が営まれます。弥生時代後期はそうした気候変動が生活に大きな影響を及ぼし、それに対応しつつ低地や丘陵上を移動しながら集落を作ったといった時代といえます。

②高地性集落

弥生時代後期には日本列島西部を中心に丘陵上や高台に空濠や土塁を廻らし、その内側に住居を構える集落が営まれる例が多数検出されています。それらの遺跡からは一般に日常雑器とともに石器類・鉄鏃などの武器が出土する事例が多く報告されており、「高地性集落」とよばれています。いわゆる「倭国大乱」（『魏志』倭人伝）の時代、集落間の戦乱に際して作られたといわれています。

☆美濃山遺跡（美濃山出島他）

2015年～19年の新名神高速

道路建設に伴う美濃山遺跡（美濃山狐谷・中尾・出島他）の発掘で、弥生時代後期の遺構・遺物が多く検出されています。遺構としては竪穴建物25、土坑8、溝10。遺物は4割～5割が弥生土器で、総計346点出土。内訳は、壺38、甕94、高坏54、器台21、鉢94、手あぶり土器4、等です（『京都府遺跡調査報告集第183冊』）。この美濃山遺跡で検出された住居は生駒山地から派生する北河内地域の枚方丘陵・長尾丘陵の住居（例、藤坂東遺跡）と同様の構造（屋外排水溝をもつ住居）です（京都府埋蔵文化財調査研究センター「143回埋蔵文化財セミナー弥生時代の住宅事情」2020）。この時期、内里八丁遺跡でも多地域との活発な交流が窺えますが、美濃山遺跡でも同様のことがいえます。

☆美濃山廃寺下層遺跡（美濃山古寺）

美濃山廃寺下層遺跡は美濃山廃寺跡の下層にある遺跡です。2011年度（平成23）、遺跡が位置する尾根のほぼ全域を調査し、弥生時代後期の竪穴住居跡を32棟、長径が8～9mの大型の建物が検出しています。遺物としては甕や鉢など、様々な形や大きさの弥生土器が出土しました。

☆備前遺跡（八幡備前他）

平坦部の無い丘陵斜面に5基のテラス状住居が確認され、遺物としては祭祀に用いられたと推定される石剣と石戈（九州型）が出土しています（『八幡市遺跡地図2005』）。なぜわざわざ丘陵の斜面に住居をつくったのか、遺物からは、はるか離れた九州方面との接点が推察される遺跡といえます。

☆他の高地性集落

八幡市域では他に、標高40～50mほどの美濃山丘陵の見晴らしの良い場所を中心に急に小規模の高地性集落群が出現します。主な遺跡をあげると、南山遺跡（八幡安居塚・南山、竪穴住居14棟他）、西ノ口遺跡（美濃山西ノ口他、竪穴住居3基木棺墓1基）、宮ノ背遺跡（美濃山宮ノ背、竪穴住居4基）、宮ノ背西遺跡（美濃山宮道）、幣原遺跡（男山竹園他）などです。これらの高地性集落は武器となる石器などが少ないことから洪水や集落間の連絡などに備えて、高地で生活した集落とも考えられます。他に弥生土器の散布地として中ノ山遺跡（男山吉井他）、柿ヶ谷遺跡（八幡柿ヶ谷）、魚田遺跡（岩田西風他）、川口扇遺跡（川口東扇他）・山田遺

✓跡（八幡山田）、式部谷遺跡（男山指月）があります。

四、豊穰を願い、銅鐸を共有する集落

弥生後期～末期には水稻耕作が定着し、ムラにより富が蓄えられ、強いムラが弱いムラを支配する階層化が進みます。ムラの集団どうしが拡大・縮小・統合などを繰り返し、地域社会のまとまりが変化していきます。八幡市域でも集落が急増。濃密に分布しますが、継続せず、やがてその多くが消滅していきます。この時代、八幡市域の重要な遺物として、1962年（昭和37）、式部谷遺跡（男

山指月・旧八幡町清水井）から発見された大形銅鐸（突線鈕式（3式）六区袈裟文銅鐸66cm）「同時に弥生土器も出土」があります。2世紀代に作られ、山城地域で出土した弥生後期の唯一の銅鐸、銅鐸消滅直前の最終段階の型式です。八幡市域の集落あるいはその共同体が持っていたと考えられます。三川（木津川・宇治川・桂川）や巨椋池の水運・陸運面からみると対岸の拠点集落である佐山尼遺跡・佐山遺跡（久御山町）との関連もあるかもしれません。

銅鐸の歴史をみると、弥生時代前期の終りあるいは中期初頭（紀元前4～3世紀頃）から作られ始めた



八幡市出土の式部谷銅鐸と同型式の銅鐸
突線鈕式袈裟文銅鐸

<https://colbase.nich.go.jp>

いわれ、その時代は400～500年間続きます。銅鐸は初め共同体の所有物として収穫・豊穰を願い、感謝する祭りの祭器でした。揺り動かし音を響かせて使用（聞く銅鐸）され、使用した後は地中に埋納されました。このような銅鐸は、はじめ20cmぐらいの高さでしたが、時代とともに大形化。次第に装飾も多くなり、自重に耐えられなくなり、鳴り物の機能を失います。その役割は富を蓄積してきた地域どうしの同盟や首長の権力のシンボルとしての「見る銅鐸」に変化していくといわれています（福永伸哉『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会）。式部谷遺跡で発見された銅鐸は大型化していく途中、鳴り物の機能を失った「見る銅鐸」です。近畿圏にその範囲を持つ形式で、河内地域で作られたものではないかといわれています。式部谷銅鐸は人里離れた山中に完全な形で埋納されていました。銅鐸を持っていることは、その地域や集落の繁栄、勢力の大きさを示しています。式部谷銅鐸は弥生時代後期、山城地域出土の唯一の銅鐸です。しかし、やがて2世紀末～3世紀初めに銅鐸は姿を消し、その時代は終わります。この段階の銅鐸の最後の段階のもの

は完全に破片の形に碎かれて出土する場合も多々あり、なぜ破壊されたりするのかわからない。なぜ突然姿を消してしまふのか、興味深い問題です。

この時代の日本について、『魏志』倭人伝は次のように記しています。「日本では2世紀の後半に戦乱が続き、諸国は共同して卑弥呼という女王をたて、3世紀前半には邪馬台国を中心とする約30国からなる連合体をつくっていた。卑弥呼は、239年（景初3）以来たびたび魏に朝貢し、魏は卑弥呼に対し、『倭国』の支配者であることを示す『親魏倭王』の称号と金印紫綬・銅鏡100枚などを授けた」と。卑弥呼は248年頃、狗奴国（愛知県あたりか？）との抗争中、亡くなり、人々は大きな墓（箸墓古墳？）を造ります。卑弥呼が亡くなり、時代は弥生時代から古墳時代へと移っていきます。この卑弥呼の時代、銅鐸に代わって登場してくるのが呪術的な宝器であり、威信材である銅鏡です。八幡市域でも古墳時代前期～中期初頭の古墳からその宝物である中国鏡が多く出土しています。

◆ 推しの二冊 ◆

『瞬時の一太刀』

ある軽輩武士の生き方』

(水野保 著／文理閣)

吉川せい子

【著者紹介】

1949年生まれ。立命館大学法

学部卒業。

卒業後、学校法人「立命館」勤務。

在勤中に立命館大学学生将棋研究会顧問を皮切りとして、あらゆる将棋クラブの、要職多数を兼務。将棋ペンクラブ会員でもあり著作も多い。現住所のある八幡市にて老人クラブ連合会将棋部長、日本将棋部連盟公認将棋指導員の資格を持ち、子供達の指導にも力を入れる。

このたび上梓となった『瞬時の一太刀』は、そのまえがきに随筆と小説とあるように、随筆12編、「歴史上の人物と将棋」と題して、歴史上有名な人物に将棋を指させてみたらばおもしろかろうと、著者の大胆な試みの小編3つ。そして、時代小説『瞬時の一太刀』前後編の大作が収められている。

随筆も小説も、当然のことながら将棋にまつわる内容である。私など

将棋の知識も経験も皆無に近いが、心配無用。読み始めるや引き込まれてしまう。それは畢竟、著者の練達の筆の冴えがあるが、つまるところ、著者の生き様による。その日常は将棋一筋と思いきや、俳句、麻雀、カラオケで演歌を張り上げるなど、何にでも好奇心旺盛のお人柄と拝察。その生き様の厚みが水櫃また創作の魅力となつて、読者を引き付ける要因であろう。

さて、小説『瞬時の一太刀』である。江戸中期の佐賀藩。勘定方を務める軽格武士の古賀平八郎が主人公である。戦乱の時代から百年以上経た享保年間、表向きは平和でのどかであるが、財政逼迫の藩の内幕はどちらとした権力闘争が渦巻いている。平八郎がひよんな理由から、上司の勘定奉行から政敵の筆頭家老の暗殺を持ちかけられる。奉行の命令とあらば、自らの命などおもんばかる余地などない時代である。平八郎の苦悩はいかばかり。どうする平八郎！



『楽しい孤独』

(大谷弘至 著／中公新書フクレ)

吉川せい子

小林一茶と聞けば、俳句をやる人やらない人に限らず、その名を知らない人はいないだろう。その親しみやすい句柄とともに人柄を愛され、彼に関する著作も数多く見ることが出来ます。

この書は、一茶の生涯と辿りながら、詠まれた句にまつわるエピソードとともに、当時の世相なども詳しく述べ、ユニークなのはそのエピソードの延長で令和の今の世相や政治まで話題が及ぶ。その振幅が素晴らしい。

一茶が生まれ生きた江戸末期の時代というのは、大衆文化の花開いた時代でした。庶民は普通に寺子屋で読み書きを習い、大衆小説の出版物を読み、芝居小屋に出かけて人形浄瑠璃や歌舞伎を鑑賞していました。街道も整備されていたので、旅をして観光などを楽しんでいました。昨年のNHK大河ドラマで放映された『べらぼう』の蔦谷重三郎が活躍した時代と重なります。同じ俳人の松尾芭蕉や与謝野蕪村と比べて、古典の素養がないから句に深みがないなどと比較されますが、古典はともかく

も教養などは寺子屋の師の名前など見れば、存分に備わっていたのではと、私などには思われます。

表題の「小林一茶はなぜ辞世の句を読まなかったのか」という投げかけも、老いるにつれ、近づく死を予感して覚悟の辞世の句や歌を詠むというのが教養人の常識でありましたが、一茶にはそれが見当たらないということでしょうか。

生涯に2万句詠んだと言われる一茶。メモ魔と言われるほどに、日記や記録をまめに書いて残している一茶。当時としては汚毒ほどの長生きをした一茶。37歳位には俳諧宗匠の地位を得て、江戸にも世間にも故郷の柏村にも名の知られていた一茶が、辞世の句をなぜ残さなかったのか。作者の大谷弘至は、一茶の生涯を辿りながら、この疑問を解くことができたのでしょうか。『楽しい孤独』という書名に答があるような気がするのです。



『オスマン帝国』

イスラム帝国の「柔らかな専制」

(鈴木董 著／講談社現代新書)

伊藤錚治

イタリアの文化、歴史を読み続けているうちに、この題名の本を読むことに思い付いた。栄光のヴェネツィアが次第にオスマン・トルコによって圧迫され、地中海の一都市国家に転落してゆく中で、オスマン帝国とは何かと興味をそそられたためである。

「ローマやビザンツの繁栄について語られることは多くても、オスマン帝国について語られることは、わが国ではほとんどない。我々日本人が西欧中心史観に馴れ親しみすぎているため、イスラム世界に成立したこの帝国が、六百数十年にわたって生き続けてきた超大国であったことすら忘れられているのである。

それだけではない。この帝国についての、わが国ではなほ乏しい知識の中では東洋的な専制の国、トルコの脅威の源泉、コンスタンティノープルの破壊者といった暗いイメージが浸透している。さもなくれば、ハーレムの秘められた世界といった興味本位の官能的なイメージで捉えられがちである。ところがこのよ

うなイメージは、実はほとんどが西洋人がかつて創り出したイメージの受け売りに過ぎないのである。実態は、それとは大きくかけ離れている。」

筆者が右のように述べるくだりは、まったくもって当然でないかと思う。栄光のヴェネツィアにしても、地中海の覇権を守るために、それこそ絶え間なく戦争をしていたなどとは、到底知る由ではなかった。歴史は表面に出てくる裏にあるものの理解をして当たり前にちがいないのだが、同時に状況といったものに流されやすい一面を持つていることも確かなことだと思う。

この本を読んで一般的に言えることは、オスマン帝国が異民族や異教徒に対しては寛容な姿勢であったことがうかがえる。もともとこの地域の民族が寛容な精神をもっていたのかもしれない。それに昔から文明の十字路と言われるこの地域は東西交易も盛んで、人や物の往来が頻繁なために、共存という必要性を培ってきたことは確かであろう。

筆者によれば、一つの帝国が100年や150年、或いは200年近く続くということは世界史には多いが、これだけの帝国で600年以上続いてきたことは並大抵のことでは

ないと述べている。そうればそうであろう。徳川幕府でさえ島国であったという条件を入れて260年である。アメリカと覇を競ったソビエトにしても、70年ほどで崩壊している。現代に生きる我々がソビエトという大国が崩壊した過程をリアルタイムで見えてびびくりするのだから、600数十年も一つの帝国を続けてきた歴史は、とにかく大変なことに違いない。紀元前の昔、地中海に覇を成したカルタゴは700年も栄えたのだから、これはもう驚異に値する。戦争をするときは傭兵を雇って戦争していた。そのカルタゴはローマ軍に攻められて滅ぶのだが、カルタゴの廃墟の上に立ってスキピオ・アフリカスは、強者もまた滅ぶと語ったと伝えられている。

筆者はその長く続いた政権の構造が、「柔らかな専制」にあると見ているのだが、これを実際に行使してゆくことはどんなにか難しいことであつたらう。

オスマン帝国の成立、1000年以上続いた東ローマ帝国の崩壊につながったコンスタンティノープルの攻防、イスラム世界の話、歴代のオスマン行程の素顔など、興味深い叙述が各省で述べられている。

『アゲもん』

(稲田豊史 著／角川書店)

佐藤長作

この書籍の副題は、「破天荒ボテトチップ職人・岩井清古物語」です。著者は、ここで「破天荒」を、——誤用が多い言葉ですが——「誰も成し得なかったことを初めてすること」として使っています。

岩井清古は、1930年(昭和5)、群馬県の馬山(まやま)村(現在の下仁田町馬山地区)に生まれます。日本の開国をきっかけに養蚕業は急速に発展し、明治政府の時代になると富岡製糸場を建設し、フランスから技師を呼んで器械製糸技術を導入します

1909年(明治42)には、日本の生糸輸出量は世界一となり、日本の養蚕業は絶頂期を迎えます。こうした時期に岩井清古は生を受けたのです。



しかし、1929 年（昭和 4）の世界恐慌、1935 年（昭和 10）の米デュポン社のナイロンの発明、1941 年（昭和 16）の太平洋戦争の勃発により生糸や繭の価格が世界的に大暴落し、養蚕業は急速に衰退していきました。

こうした状況のなかで、岩井清吉は東京へ出てポテトチップスの世界の道へ進むことになります。

ポテトチップスの起源は、ペリーが来航した 1853 年（嘉永 6）にさかのぼります。アメリカニューヨークのサラトガ・スプリングスのレストランの料理人が、薄切りのジャガイモを大量のラードでカリカリに揚げ、大量の塩をふりかけて提供したところ大好評でした。「サラトガ・チップス」の名でメニューとなり、これが後のポテトチップスとなりました。

岩井清吉は、「菊水堂」を立ち上げ製造を開始します。

2024 年（令和 6）現在、日本ではポテトチップスを一定規模以上で通年製造するメーカーは、10 社程度と推定されています。そのうちよく知られているのは、カルビー、湖池屋、山芳（やまよし）製菓、ヤマザキビスケット、深川油脂工業、菊

水堂、松浦食品、福博食品の 8 社です。菊水堂は、8 社の中で 6 番目。国内シェアは 0・3 パーセント前後しかありません。

本書は、菊水堂のような零細企業が、なぜ生き残り存続できているのか明らかにしようとしています。



『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか』

（湯澤規子 著／ちくま新書）

佐藤長作

「ウンコ」とは、大便、便、糞などの別の言い方といえます。糞は、食べた「米」が「異なるモノ」になっ出てくる意味ではなく、「畑に両手でまく」ことを意味する説も存在するようです。「糞」が肥料であると解釈することもできそうです。

中世では、有用な資源という価値づけはなく廃棄されていました。

近世、江戸時代の元禄期頃は農業技術の発達した時期でした。新田開

発、商品作物の栽培が盛んになりました。増加する人口を扶養するため、生産性の高い農業技術が求められ、農業技術所も生まれました。糞尿の肥料としての使用は鎌倉時代でしたが、江戸時代に本格的に使用されることになります。

近代になると、農業技術は近世に比べてさらに飛躍・発展します。しかし大正期になると都市消費者向けの蔬菜、果樹、畜産の農業が求められ、購入肥料（金肥）が増加していきます。ウンコ（糞尿）も肥料として役割を果たしていました。

一方で、都市部では糞尿処理が始まりました。糞尿は肥料としてではなく、廃棄物へと変化していきます。東京市、大阪市、名古屋市などの急激な都市化が招いた結果ともいえます。

大量排泄の時代と形容できます。大量の胃袋が都市や工場に流入し、大量の尿尿が都市や工場地域に集積することと言えます。その量は農地に還元できなくなり、社会問題となっていきます。

東京オリンピックの開催決定は、下水道の整備を加速しました。道路や上水道の事業重点からの転換を余儀なくされた転換点といえます。

1950 年（昭和 25）、尿尿の汲み取り作業を人力から、川崎市が日本初のバキュームカーを導入します。そしてバキュームカーも、限られた地域を除いて下水道の普及によつて姿を消そうとしています。

ウンコが農地に還れなくなったのは、私たちがウンコに含まれる物質を変化させてきたからです。トイレや台所から様々な物質が混入するようになりました。現在では、下水処理場の「汚泥」は建材などに利用されています。



『日本の町』

（丸谷才一・山崎正和对談集）

／文藝春秋

上野卓彦

日本は海に囲まれた島国で、古来より物流といえば船舶によるものだった。北前船をはじめ、海運が発展してきた。それらは日本海側が特に発達していた。ところが日本の船乗りたちは航海日誌を書く習慣が、

くなかった。それは、口伝による一種の秘伝であつたのだらう。会話言葉で後輩の船乗りたちに運航のコツを教えた。

彼らが航海日誌を書かなかつたのは秘伝ということもあるが、同時に日本海航路は陸に近い海路、つまり内陸航路を進むために、後世の者に残すほどのことはなかったという考え方もできる。

船乗りたちは、北海道から酒田や能登、下関を経由し、瀬戸内海を通過して大坂にモノを運んだ。船乗りたちは船主のための記録を残さなかった。これは、今から考えると非常に惜しいことである。北前船などの航海日誌が残っていたら貴重な史料になったと思う。

西洋では、航海日誌を書くことが当たり前だった。この日誌を読んで後続の船乗りたちは運航の技術と知恵を学んだ。そして、この航海日誌なるものが西洋の散文文学の源流であるという。彼ら西洋の船乗りたちは、船主に対して自分たちがどのように航路を進んでいったのかを説明する。この日誌が洗練されていくことで散文となり、やがて物語として成立していく。ダニエル・デフォー（1660～1731）は『ロビンソン・

クルーソー』を、ジョナサン・スウィフト（1667～1745）は『ガリヴァー旅行記』を書いた。航海日誌が作り上げた散文がすぐれた冒険小説になった。

一方、航海日誌を書かなかつた日本の場合、散文というのは小説家が作り上げたもので、デフォーやスウィフトのような冒険物語などにはならず、色恋沙汰や家族の内紛や、猫から見た人間の暮らしなどが小説となっていた。

こうしたおもしろいことを、丸谷才一さんと山崎正和さんが『日本の町』という対談集の「松江」のところで語っている。他に、金沢、小樽、宇和島、長崎、西宮芦屋、弘前、東京が題材に取り上げられている。※本書は絶版。古書で入手可能です。



『後列の人』

（清武英利 著／文藝春秋）

上野卓彦

本書の「はじめに」に、こう書かれている。「最前列ではなく、後ろの列の目立たぬところで、人や組織を支える人々がいる。役所の講堂や会社の大会議室に集められたとき、たいてい後列に位置を占める人たちである」。ここに登場する「後列の人」に注目する著者の目線、これが素敵だと思う。後方から支え、最前線で活躍する者を補佐する。いや、補佐などという生易しいものではないケースもある。しかし、脚光を浴びる光の中に立つのは最前線の者であり、後列の人にスポットライトは当たらない。そして、それで後列の人は充分満足している。

最前列の者は後列の人を大切にする。例えば、有名な映画賞を受賞したとき、主役俳優がよく言うセリフに、「ここに私が立てたのも、多くのスタッフに支えられたおかげだ」というのがあるが、これは後列＝裏方への感謝の思いである。

清武氏は元読売新聞の編集委員であり、読売巨人軍球団代表であった。だが、渡邊恒雄（ナベツネ）氏の頭越しの球団経営介入に反発し、組織

を飛び出した。いわゆる「清武の乱」である。その後、ノンフィクションライターとなり、優れた著作を次々と発表していく。バブル経済による日本経済の瑕疵を描いた『しんがり山一證券最後の12人』をはじめ、『トツカイ不良債権特別回収部』など、組織と人間が時代の中で引き起こした現実の物語を、新聞記者出身の冷静な筆致と、弱い者に対する優しい目線で描く。

『後列の人』は、著者の優しい眼差しが十二分に詰まった読み物だ。「君死給う」「新しき明日の来るを信ず」「ススメ ススメ コクミン ススメ」「おごりの春の片隅で」「さよならへ日本株式会社」「身捨つるほどの祖国はありや」と全8章に編まれたなかに3話、全18話が盛り込まれている。いずれも、さまざまな局面で後列に位置する人たちが取り上げられている。これは戦後日本をつくりあげてきた人びとの記録であり、すぐれた現代史の脇住還である。



窒素肥料を施肥しないと作物は育たないのか

―過剰投入で環境汚染と温暖化加速―

佐藤 長作

今回のテーマは、自然循環を目指す農業を考えます。

○窒素肥料の過剰投入で、環境汚染、地球温暖化ガスの排出を加速している

化学工業における窒素化合物の基本的な製法に、ハーバー・ボッシュ法があります。高温・高圧の下でアンモニアを生産します。人類にとっては、素晴らしい発見で発明でした。

人工的な窒素固定は、大量のエネルギーが必要です。アンモニアを製造するためには、リン肥料生産の6倍以上のエネルギーを必要とします。

世界のエネルギー消費量の1〜2%、二酸化炭素排出量は、年間5600万トにもなります。さらに生産された窒素肥料の運搬や施肥するときにも、二酸化炭素の排出を伴います。

化学肥料として施肥されても、植物に取り込まれる窒素成分は10〜40%にすぎません。吸収されないで残った窒素成分は、大気中で亜酸化窒素に変化し、温暖化ガスとなります。二酸化炭素の296倍もの温室

効果をもたらし、オゾン層破壊のガスにもなります。農地からの窒素成分(硝酸態窒素)の流出による飲料水・地下水汚染も問題視されています。

このように、ハーバー・ボッシュ法はエネルギーの無駄遣いと、環境破壊の一因となっています。

窒素は植物にとって必須の元素と言われています。動物であれば、アミノ酸が筋肉に欠かせない要素であり、窒素が必要となることは容易に想像できます。しかし植物は、動くことはしないので筋肉らしきものは存在しません。植物で重要な仕事は光合成です。窒素はその、カルビン・ベンソン回路と言われる光合成を助ける酵素の材料となります。植物にはこの酵素が大量に必要とされ、窒素は植物の必須の元素なのです。

○微生物によるエネルギー循環は、土壌の再生エネルギー

森林では肥料をまったくやらなくても、樹木や植物は健全に育っています。当然、光合成が行われています。光合成を行うために、窒素元素が供給されていることになります。マメ科植物だけが窒素固定をしているならば、森林での植物の成長は説明できません。窒素固定が可能な植物がマメ科植物だけであるならば、それ

以外の植物は生き残れないということになってしまいます。マメ科植物だけではなく、多くの植物も窒素固定を実現していることは明らかです。

この事実から、植物が必須とする窒素は、化学肥料を施肥することなく実現できると考えることができます。人類が人工的に窒素固定を実現する以前に、微生物は数億年前から窒素固定や、窒素の自然循環を実現していました。

○窒素を施肥すると土壌微生物はどうなる

根粒菌などの窒素固定菌は、低温・低圧で窒素を固定します。ハーバー・ボッシュ法では高温・高圧が条件です。

マメ科植物の窒素固定に必要なエネルギーは、ハーバー・ボッシュ法の4倍のエネルギーを必要とします。このエネルギーは炭素です。ですから、近くに化学肥料などの窒素が存在すると無駄なエネルギー消費を避けて、根粒菌は窒素固定を止めてしまいます。

しかし菌根菌は、炭素が多く、窒素が少ない状態では「窒素飢餓」と認識して窒素固定を行います。この過程で、菌根菌などの微生物は数を増やしてゆきます。

有機農業は、化学肥料や農薬も使用しない農業と認識しています。自然に優しい農業と思われれます。窒素に関していえば、過剰施肥が問題のようです。完熟堆肥であっても、窒素分が過剰の場合が多いようです。

結果的に、窒素固定菌の活動が阻害されている例が多くなるようです。施肥する段階では、炭素分と窒素分の比率が、20対1が良いという報告があります。

無耕起・無肥料・無農薬・無除草という自然農法があります。これは土壌の微生物の自然循環に依存しています。自然農法は収量が問題視され、非効率な農法というイメージを持たれるようですが、慣行農法に匹敵する収量をあげている経験も報告されています。数年で慣行農法よりも収量が勝る報告も存在しています。

○大量の石油を使う化学工業に依存することなく脱窒素農業を目指す

私たちは石油化学工業に依存して、化学肥料・農薬を利用して消費的農業生産の道を選択するのか、それとも自然循環を選択して生産的農業生産を目指し、地球の環境破壊を防ぐ道を選ぶのかの岐路に立たされているのではないのでしょうか。

八幡俳句歳時記 26

俳句はおもしろい (4)

土井 重悟

◆近代俳句の誕生—子規と虚子

近代俳句の誕生を語る時、正岡子規（まのりおかしき）と高浜虚子（たかはしきよこ）の名は外せない。子規は、俳句革新運動を提唱したとされる。それまでの俳諧の何を革新しようとしたのか。

あた、かな雨がふるなり枯律

明治23年の作で、俳句評論家の山本健吉は、この句は、まだ子規が写生に開眼する以前だが出色の句であると評価している。どこが出色なのか。「枯律」は荒地などに茂った草が枯れている様を示す冬の季語である。蕭条とした冬の景は、それに相応しい心象を描出することが多い。だが、「あたたかな雨がふるなり」と言い切った。あたたかな雨を得て、生色を取り戻したとし、おざなりの表現を拒否したことを良しとするのである。

以下、この頁の句の作者は例外を除いて子規を指す。

水うてば犬の昼寝にとゞきけり

涼をとるために水を打ったが、昼寝中の犬にそれが届いてしまったという。犬は昼寝を覚まされたのであろう。そこになんとも言えないユーモアがある。或いは俳味といったものか。

子規は写生を提唱したとされる。写生とは、西洋画の画法であるが、それを文芸上の方法として、また、「俳句革新」の手段として採り入れたのである。

「水うてば」の句も、写生に徹することとで生み出されたものと思われる。

喃お僧初瓜一つめすまいか

前の号で触れた如く、子規は、蕪村の句を高く評価した。「喃お僧」と呼びかけ、初瓜をいかかと会話文をそのまま句に表現した。平易でウイットに富み親しみ深い。まさしく軽妙洒脱な句づくりである。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

中学校の教科書にでも載っている誰もが知っている句である。だが、少し吟味すれば、不思議な句だと思ふ。

まず、現代の散文では見られない言い回しが見られる。「ば」は、通例、理由と結果をつなぐ助詞として機能する。だが、「柿を食う」とことと「鐘が鳴る」

こととは関係がない。「柿を食ふと鐘が聞こえてきた」が正確な表現である。だが、それでは俳句にならない。俳句という韻文の韻文たる真髓がここにある。

芭蕉の句にも食物を詠んだものがあり、それぞれ味わい深い。

あさがほに我は食くふおとこ哉

あられば網代の氷魚を煮て出さん

色ははや豆腐に落て薄紅葉

梅苺菜まりこの宿のとろろ汁

但し、それぞれの食物の属性を豊かに表現したもので、それが別の事柄につながっているものではない。

また、「柿を食ふ」という俗なる行為を「法隆寺の鐘」という歴史的、文化的な事象にむすびつけている点がおもしろい。「帰俗高悟」の精神に通じると言うべきか。

江戸時代にこんな句がある。

うどん焚く空や雨夜の雁の聲

樗良

樗良は蕪村とも交友した中興期の俳人の一人である。「うどん焚く」という俗なる行為を「雁の聲」という歌語に結びつけることで高悟なる精神性を獲得したとも言える。

井戸端や鍋も盥も雪の上

「井戸端」は庶民が暮らす長屋の中央にあつて、米を砥いだり野菜を洗ったりするうえで、食生活に欠かせぬ場所である。そんな日常を提示したうえで、「鍋も盥も雪の上」とした。そこに詩情を込める。

昨晚たんと降った雪も今朝は晴れ上がり、朝日できらきら輝いているかのようである。その上に鍋や盥という俗なる物を並べ、今日という一日が始まるとした。逞しく生きる市井の人々を活写したと言える。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規は、21歳の時に咯血した。肺結核であつた。その後脊椎カリエスを患い寝たきりとなり、妹の律と母が献身的に看病した。

雪の降った朝、どれだけ積つたのかを確かめることができぬ子規は、その様子を幾度も律に尋ねるのである。

病身の子規は、生前、現代俳句の行く末を高浜虚子に託した。

虚子は、十七音定型を守り、季題は句の内容に先行するという古典主義をとる「守旧派」であることを宣言し、子規の提唱する「写生」に重きを置いた。

以下、私が感銘を受けた句を紹介し、その傾向を述べてみたい。

1、写生のバリエーションの豊かさ

虚子の写生は、対象を様々なバリエーションのもとに捉えた。

遠山に日の当りたる枯野かな

季題は、「枯野」である。つまり、冬の情景を描くことに眼目があるのだが、それを遠景（遠山）に日が当たることと対照させ枯野を強調させた。

鳥飛んでそこに通草のありにけり

動と静を同時にとらえ、時間の流れのなかで、瞬間の絶対性を際立たせた。その点では、次の句もそれにあたる。

流れ行く大根の葉の早さかな

2、写生に潜む抒情

また、「写生」といえば即物的なもののように聞こえるが、決してそうではない。そこに、抒情や主観、感覚的な情緒を表現することにも長けている。

春雨の衣桁に重し恋衣

この句に、衣を衣桁に掛ける主がいるわけではない。だが、恋に疲れ、或いはやるせない思いをしている女の姿が彷彿とすると感じるのは私だけではない。

もの置けばそこに生れぬ秋の蔭

この句など実に感覚的なもので、主観写生と言えるものであろう。

初蝶を夢の如くに見失ふ

写生を超えた幻覚とも言えるものではないか。そして、対象をではなく、対象を捉えた主体＝人間をこそ描こうとしている。

3、写生に見出す伝統美

地名とそこに因んだ歴史や文化をさりげなく提示するのは作句する上で参考になる。

道のべに阿波の遍路の墓あはれ

四国遍路は、中世において、大師信仰を基に聖たちの修行を経て、近世期に遍路地図ができるなどして大衆化した。だが、決して「物見遊山」の様な

行楽ではなかった。「墓あはれ」の句は、そんな歴史の一端を垣間見させてくれる。

秋篠はげんげの畦に仏かな

秋篠寺を訪ねた者は、先ず周辺の鄙びた景観を思い浮かべるであろう。「げんげの畦」はその象徴である。そのなかに、廃寺もどきの御堂を見出し、密やかに匂い立つ技芸天に目を奪われるにちがいない。

手鞠唄かなしきことをうつくしく

「手鞠」のもつ民俗性を「かなしきこと」とし、そこに美を見出した。

凄かりし月の団蔵七代目

歌舞伎役者七代目市川団蔵のこと。冴えわたる月光を浴びてすつくと立つ仁木弾正の凄みのある姿が思い浮かぶが、こんなことをさらりと句にするところが凄い。

春潮や倭寇の子孫汝と我

下の句で親しみが増す。汝と我に限らず島国日本の民は海浜との関わりが

深い。

4、写生に基づく卓抜な表現

以下に示した句は、それぞれ卓抜な表現によることで、句が精彩を放っていることが実感できるであろう。

溝板の上につういと風花が

念力のゆるみし小春日和かな

去年今年貫く棒の如きもの

コスモスの花あそびをる虚空かな

春の山屍をうめて空しかり

高浜虚子は、組織を経営し維持してゆく能力にも長けていたとされる。殊に、東大や京大のアカデミズムを利用した才覚は並ではなく、近代俳句を確立させた巨人とされる所以である。

協賛金のご協力をお願いします

(郵) 00940-8-196292 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会
(銀) 京都銀行男山支店 普通預金 4165224 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会